

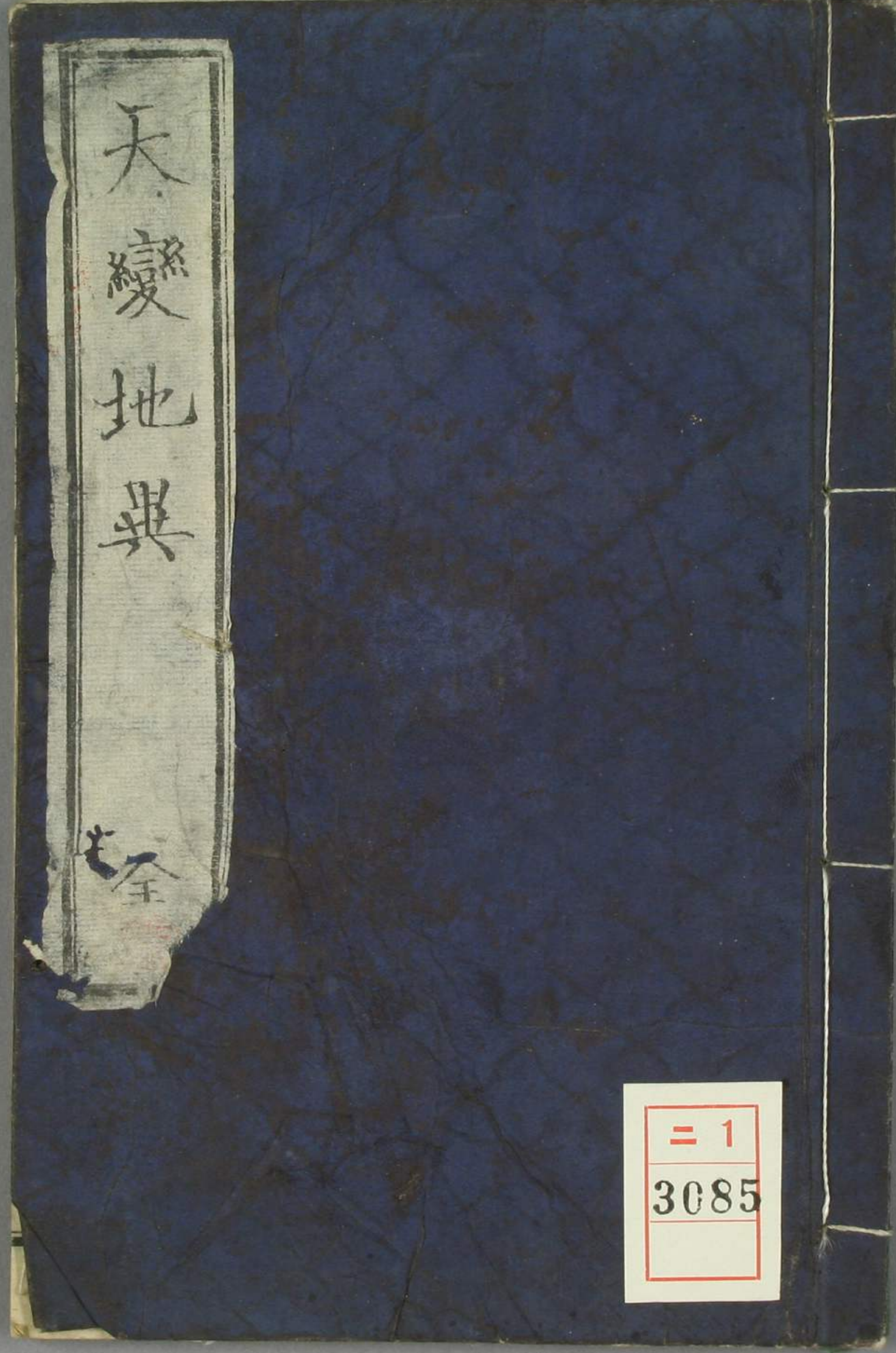
KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT



天變地異

全
五

= 1
3085



門 二 1
號 3085
卷

明治元年戊辰初秋



幡篤次郎 著

北原

北原
松田
子
書

天変地異序

孔子ハ怪力亂神を云ふことと云ふを以て是を以て後世
の大人君子を以て怪力亂神を以て云ふことと云ふを以て
も留めざるや今この冊子成て天変地異と題
一人の思儀を以て云ふことと云ふを以て海を以て云ふ
件を原より取集め翻譯して世に公せしむる
ものも奇を著りて成るべきやおれふ人の何
る歎きたるもの余嘗て本心ハ奇を折る
を推して天変ハ地異ハ異を以て云ふ

天変地異

序

一

蓋て此の解する所のありて必竟此を以て
高き地昇のしるを顯しおきそのたるは詞未く
白濁阿まゆへ能く一書を略し——
抑も世より不存の事変地火を以てその理あり
まて固よりふ之汲とすまは是れその見慣れ
申ふかして其變といはれしるありしを
おしくおき何れ怖る事何れ火の燃え水の沸
き日乾り昇るを没するは思はれしと
怖れしおきおむきと遇然す斯る事

何れハ何れとあるを証しあるは初く
あるは何れ理を又初くあるをふしあるは初
くはきやたふへあるは考へしあるは初
く世のおむきあるは何れ怖るはきを怖れを
信はれしあるは道徳としてその道理を
寸断して其書を大の思神の所おぼしむ之を
るの是れ其し其星を其の地を其の地を
神を其の思りと唱へし其の思を其の思
の理を其の思を始れ虹霞流星九日同时昇

星之月並に無りしより陰に松火振り
あつて衣むほき感成ぬのむと免一三何
を掲げ人をしとまやうは亦乃理を念念せ
しめねるくほきもの怖足貴ものをいね
家一以てせりお福お念成まきと舞りて
祿ふふのこ

壬辰年八月

芝居並に自社後

凡例

一此書元來婦人小児の惑を解た事物の道理を
究めしむるを主意とされバ勉て浅く翻訳し
我邦の國解を挿み以て人の讀み易く解し易
くかたんとを希つども敢て私意を加へ原
書の趣意を曲げざれば讀む人その淺陋を厭
ふなり

一原書の如きはその数一あつざれば一々爰に
書載せは皆彼千八百六十五年より七年迄の

書中より抄譯をりりなり

一此書中幾里と云ふものハ英國の一里ニて我
十四丁四十二間ニ寸八分ニ當リ今此を我里
法ニ改るときハ奇數を生し却て讀む人ハ不
便ふらんふと紙恐れ暫らく彼里法ハ従ふ

天變地異

目錄

雷避の柱の事

地震の事

彗星の事

虹霓の事

九日同時ふ出たる事

三月並び照る事

流星並ふ火の玉の事

陰火の事

目錄終

天變地異

小幡篤次郎 纂輯

雷避の柱の事

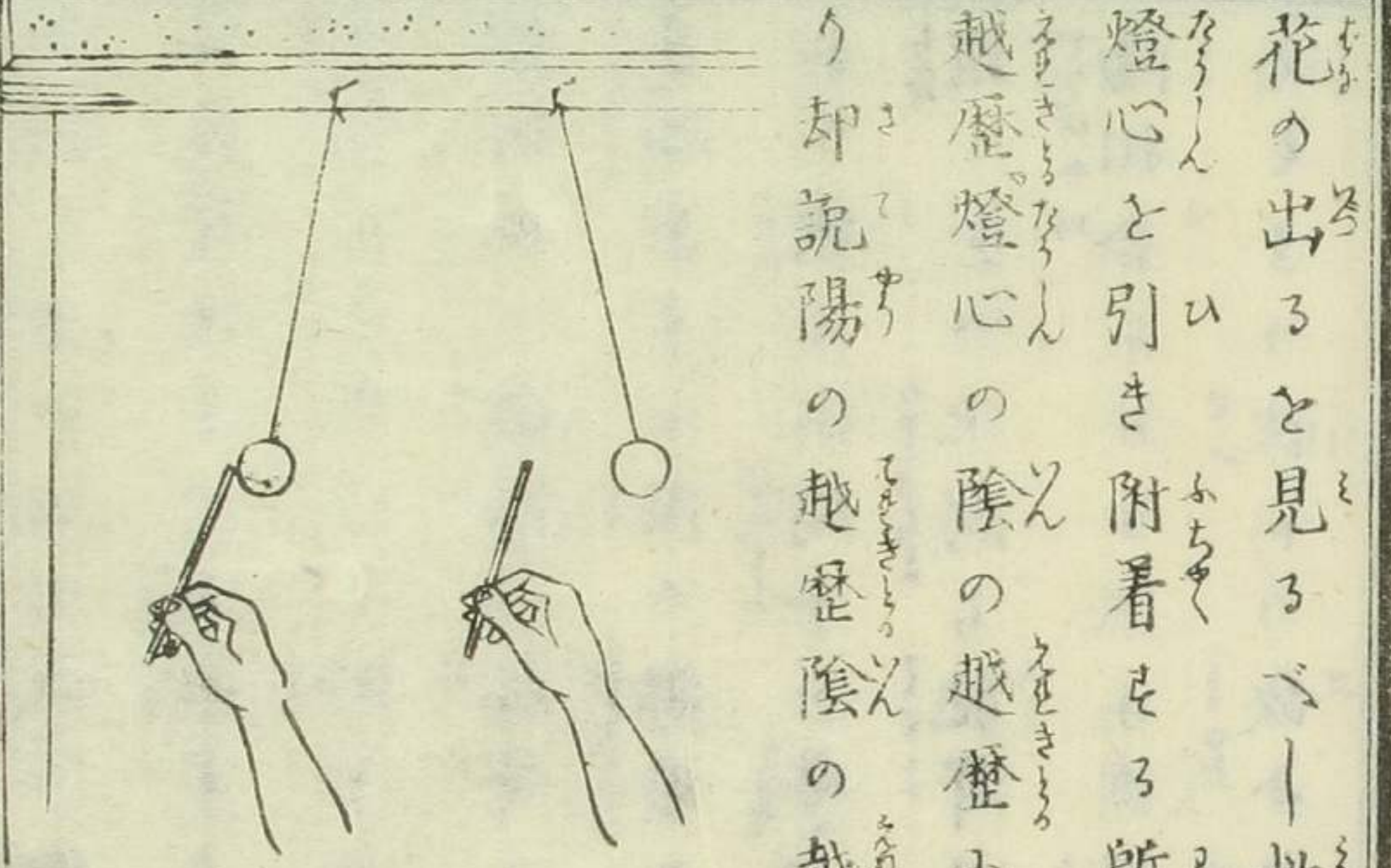
大古の識者ふき時代ハ雷と惡しき神の叫び
 と唱へ人々恐を怖さしものありがふらんま
 んと云ふ人世お出て後ハ斯る惑を説くものも
 なく此災を避る道具も出来し人の幸ひ限りふ
 しふらんまぞんハ亞米利加合衆國の人おて世

小名高き英雄ふるが年少の時より諸學志と
 潜め殊小越歴の學問小秀て興義と極めしより
 電も雷も皆越歴の所作ふらんと思付き訖度工
 夫と廻らし彼千七百五十二年我延享元年六月
 小至り雷雨の起ると待ち紙鳶と空中小放ちた
 る小雲間の越歴系は傳り種々の試験小上
 ける小聊も尋常の越歴小異ふることありきを發
 明せり歐羅巴の學者も之と聞傳へ又同しく試
 験しよる小全くふらんまきまんの説は相違ふき

よりの世の説一變一電ハ越歴の火花小て雷ハ陽
 の越歴と陰の越歴と
 合とんととるるとき
 脉一ツの間小二十八
 萬里の遠路と馳
 せり由る空の氣
 還小其行跡の空
 所と塞がんととる
 よりの響と發とと云ふ



小極よきり元来越えん越えん歴れきとハ天地間てんちかんの萬物ばんぶつ具ぐハ
 了りたる一いつ種しゆの氣きふて萬物ばんぶつ皆みな多おほ少ち小ち此こ氣きをも持もて
 ざらハふ一いつ琉りゆう珀はくと硝子しよと小最も多おほく人の躰中ちゆう
 小ちも此氣き具ぐとりたる證あかし據しハ試小ち白しろき紙を三
 重おもく或ハ四重よ小ち疊たかと暫の間火ひふて暖あたため板或ハ
 疊たかの上うへ小ち置かき手早はやく爪先さきふて六む七しち度ども摩り燈
 心こゝろの如き輕きものハ邊寄よせふハ燈心こゝろ忽とち紙
 附つく着くべ一全ぜんく紙の越歴れき人ひと身みの越歴れき小ち感かん動どうさき
 たるゆゑあり暗くら夜よ小ち之を試しくふハ爪先さき火ひ



花はなの出ると見みるべ一いつ此こ即すなはち越歴れきの火花はなあり其その
 燈あかり心こゝろと引き附着くる所以ゆハ紙小ち起おこりたる陽の
 越えん歴れき燈あかり心こゝろの陰の越歴れき小ち合あはれともるゆゑか
 り却説さつ陽やうの越歴れき陰いんの越歴れきとハ琉りゆう珀はく小ち起おこりたる
 越えん歴れきと陰と一硝しよ子しよ小ち起おこ
 了りたる越えん歴れきを陽と之
 と試むる法はうハ圖の如く
 山やま吹ふの樹心こゝろふて小ちき玉
 と造り絹糸いとと鴨居いよ

り釣^つり下げ琥珀^{こくろ}或ハ樹脂^{じゆし}と摩^まり越歷^{えいれき}と起^{おこ}し之^{これ}
小^{ちひ}近^{ちか}寄^よせおハ王^{わう}馳^ち寄^よりて之^{これ}と附^つ着^くき暫^{あひ}りて
復^{また}離^{はな}る元^{もと}の位^ゐ小^{ちひ}歸^{かへ}るべし既^{すで}小^{ちひ}離^{はな}れて後^{のち}ハ再^{また}び
琥珀^{こくろ}或ハ樹脂^{じゆし}と近^{ちか}寄^よるとも避^さけて附^つ着^くり
是^{こゝ}両^{りやう}おぐり陰^{いん}の越^え歷^{れき}おまハ相^あ嫌^{きら}ひて引^ひりさる
あり然^{しか}る小^{ちひ}硝^{しょう}子^しと摩^まり越^え歷^{れき}と起^{おこ}したるものと
近^{ちか}くまハ王^{わう}忽^{たち}ち馳^ち寄^よりて之^{これ}と附^つ着^くるは是^{こゝ}陰^{いん}
陽^{やう}相^あ合^あふぐりおまあり斯^かく越^え歷^{れき}ハ陰^{いん}陽^{やう}相^あ合^あてん
と見るの性^{せい}は故^{ゆゑ}小^{ちひ}合^あへハ靜^{じやう}よりて頭^{あたま}おれ

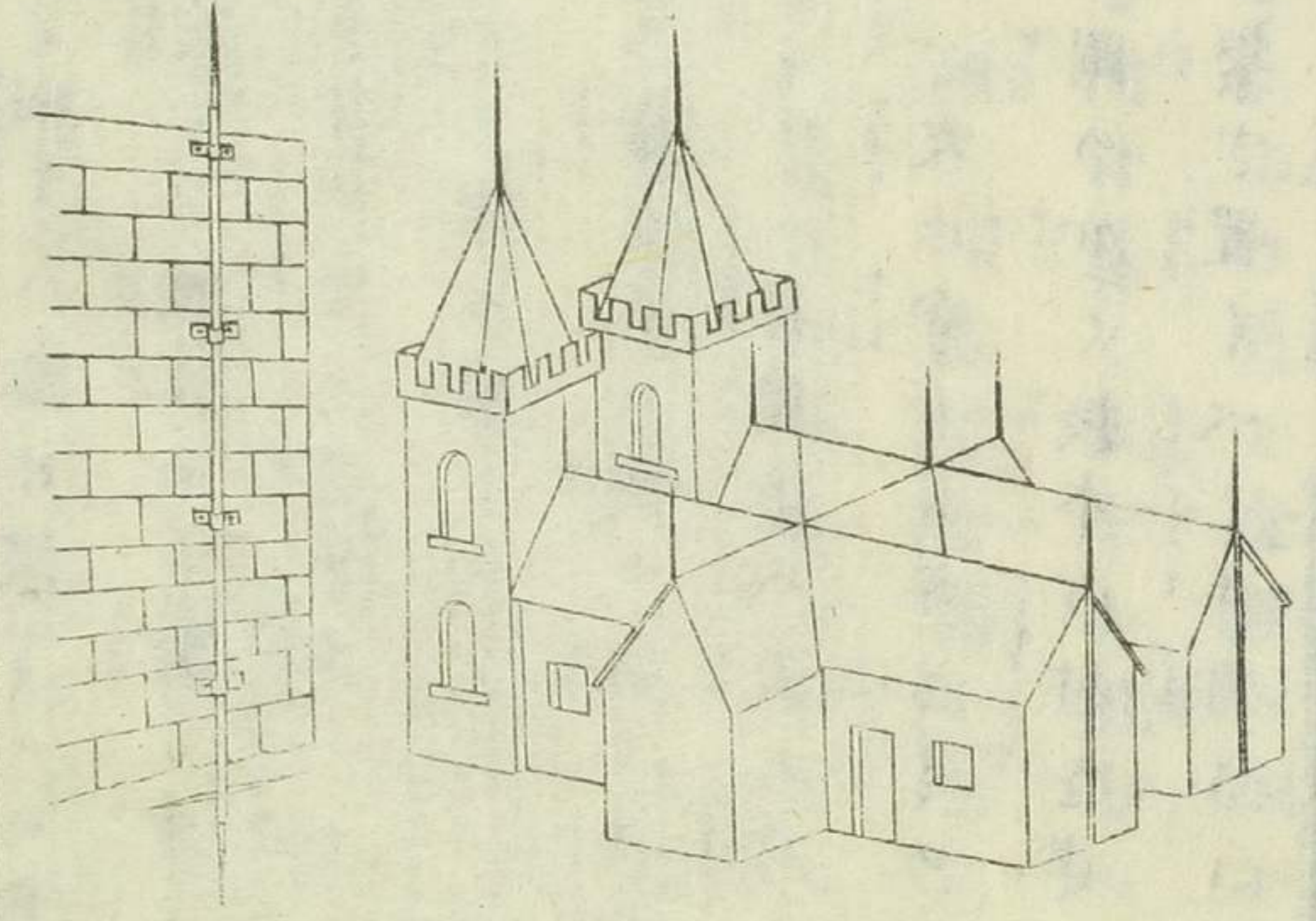
離^{はな}るまハ動^{うご}ひて合^あてんと此^{こゝ}理^り合^あり陽^{やう}の越^え
歷^{れき}と起^{おこ}したる雲^{くも}と陰^{いん}の越^え歷^{れき}と起^{おこ}したる雲^{くも}との
間^まハ越^え歷^{れき}の移^{うつ}り通^{とほ}ふことあり或^{ある}ハ陰^{いん}の雲^{くも}より
陽^{やう}の雲^{くも}小^{ちひ}移^{うつ}ることあり或^{ある}ハ下^{しも}小^{ちひ}移^{うつ}るべき雲^{くも}お
くし直^{ちやう}小^{ちひ}地^ちに傳^{つた}へることあり是^{こゝ}雷^{らい}擊^{げき}の起^{おこ}る
所以^{ゆゑ}小^{ちひ}て其^{その}速^{すみ}ハ脉^い一^{いつ}の間^まハ二^{ふた}十^{じゆ}八^{はち}萬^{まん}里^りを行^ゆく
ものあり斯^かく光^{ひかり}ハ神^{しん}速^{すみ}ある小^{ちひ}音^ねハ唯^{ただ}脉^い一^{いつ}の間^ま
小^{ちひ}二^{ふた}百^{ひやく}間^まを馳^ちまるとりのお光^{ひかり}の速^{すみ}ハ等^{たう}用^{よう}小^{ちひ}
らざるものありて雷^{らい}の落^{おち}と落^{おち}ざるを知るの法^{はう}

乃先電を見し時より雷と聞よて脈と押へ一
 二と數へ三四とふまば七八百間の鬼より來る
 ものと知るべし故小光を見て同時小音を聞
 きの小りざれバ恐る小及を又越歷ハ物
 小よりて傳より難きと易きとの差別なり金類
 炭水雪生物火焰烟湯氣の如きもの小ハ傳より
 易く就中銀銅ハ最も傳より易し琥珀樹脂琉璃
 硝子玉絹獸毛羽乾きたる木空の氣杯の如きも
 の小ハ傳より難し故小雷雨の時金箔を置きた

柱又ハ金屏風の下総て大なる金物の下小坐
 るべかたき乾きたる木ハ越歷と傳へざるとも
 湿るときハ傳より易くふるぬぬ小高木の下の
 雨を避くべし若しや雷ハ撃きて死ぬ人の
 らバ澤山小水を漑ぎ拭け手を胸板の上小加へ
 或ハ押し或ハ緩めて息を吹回し手術と施さば
 蘇生もることありと云ふ右の如く物より越
 歷の傳より易きと難きとあり故見てふ
 らんきりんハ工夫を盡し雷避の柱を造り出

けきバ之が為人命と助け家藏と守り恩澤世小
 及べること際限あり此柱と造る小ハ銅を第一
 とを色ども價貴さを以て尋常鉄より造るもの
 多し前小ハ大なる金物の下小坐るを戒め爰小
 ハ雷避のため鉄或ハ銅の柱と造ると云ふ人
 の不審を招くべし元來此柱と建る主意ハ雷と
 避るしめ小ありを雷と引寄せ善き導きりのよ
 し速小地中小散し余所の災を救ふためあり先
 建てんと思ふ屋根の上小圖の如く尖りたる金

の柱と建て四尺許り
 も屋根より高く上
 四尺ハ黄金或ハ白金
 小て鍍金まべし左ふ
 くバ錆附きて越歴傳
 り難し尖の所ハ一
 本小造るも何り或ハ
 二三本小造るも何り
 柱の太ハ徑り六分位



のちの不造るべし餘を細きハ溶け流るゝの患
 あり此柱ハ上四尺の所より継目なく駈と壁へ
 繋ぎ留め下ハ地中ハ入り三又ハ寸を其一枝ハ
 必む水ヲ或ハ湿地の中へ埋め置くべし又一本
 の柱ハてハ遠方ヲ守りとい成り難し屋根
 より高きこと四尺の所のハ其周邊八尺の守り
 と作り五尺の所のハ一丈の守りとふるものナ
 り故ハ大厦の上ハ圖の如く數本の柱を建て
 其間を太き針金にて繋ぎ置くべし手輕ふた

ハ木柱を建て屋根より上の所を金鍍の銅小造
 り継目より鉄の鎖を附け遠く水中ハ沈むるも
 のおきども用をふし難し一ハねちヤ國ハ志ん
 よろくの塔として有名のものありガ往昔より
 數度の雷撃ハ遇ひ頗る破損せりども此柱を
 建し後ハ災を被ることありとぞ又普魯士國の
 ぐろガと云ふ所ハ火藥庫ありて彼千七百八十
 二年我天明二年雷ハ撃きたきども此柱の利徳
 小よりて災ハ罹らざるを得たり「おれを名や」の

火藥庫ハ此柱ふさゆ被千七百六十七年我明
和四年雷撃ふ過ひ三千餘人の命と亡ひさう又
彼千八百三十年我天保元年英國の人をさ
氏の工夫ふて三千餘艘の船へ此柱を装置しよ
り十一年の後功驗著しけむバ政府よりご
人氏へ金三千磅即ち我九千兩の大金を恩賞せ
ふと云ふ

地震の事

地震ハ人の能く知むる山變ふて其の根源知り

難きものふと今より二千三百三年前即ち
我孝安天皇五十八年又當り希臘國ふさふさご
らさと云ふ大學者たりて地の底ふ雲を醸し電
と發せしより斯る震動ありあふんと説けり其後
彼千六百一年我慶長六年日耳曼國ふさるらと
ると云ふ識者出て地震ハ地の底は數多の大ふ
る窪たりて其一ハ水を充ち又其一ハ硝石
硫黄杯の如き燃るりのたりて互ふ通ひ水を煖
め湯氣を蒸せしより發るものと説けり又彼千六

英國の「じんこぶるん」とい

る「小生れ」といふらゆけ

と又一人ハ同國の人ぶり

とより「そて兩人とも名高

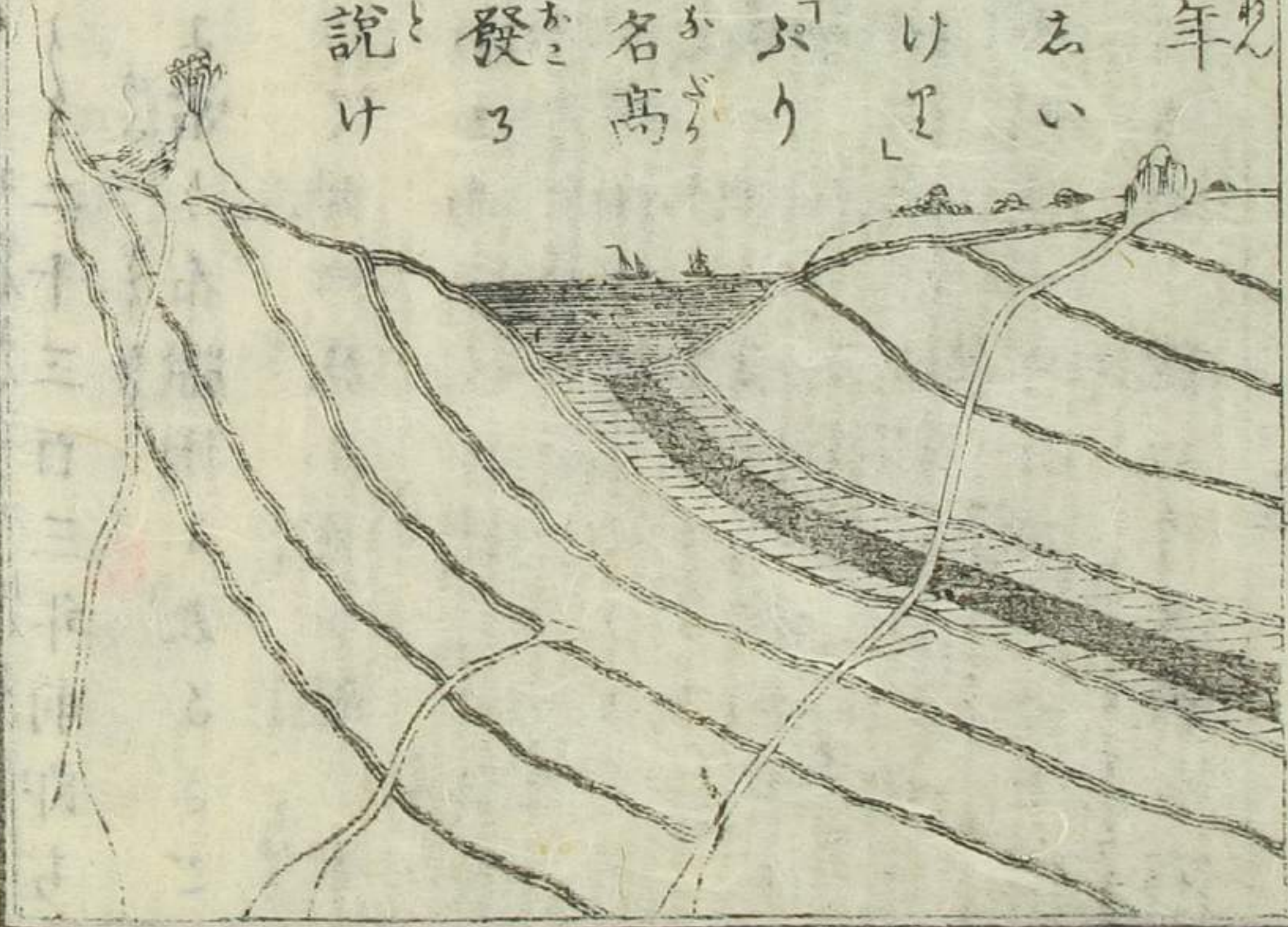
き學者ふるが地震の發

ハ越歴の所為ありと説け

「斯大古より種々

様々の説ありと

今



近代の發明にて地の底ハ一面の火あり小岩の

上皮を被り其上土地を載き人の住所とふ

り此上皮小隙より水漏れ火の中へ流を入り

しもの蒸さきて湯氣となり積て出るといれど

も出口ふく之が爲震動を發ると云ふ信ある説

あり地震の災ハ強も震動の強弱より其の

震法の模様小より強きも災の輕きより弱きも

災の甚しきより即ち其の模様四通りして左右

小動くより上下小動くより抗るより旋るより

九

此四の内不て旋地震ハ強カトさるも恐る
 きものあり大槩一度の地震ハ脈の六十度打つ
 間と過ること一折重て震動をることあり
 由名小稀ハ長き震動不逢ふことあり地震の
 為田畠埋と家邸破人畜死亡せしこと數知
 ば或ハ一村の人畜田畠全く地下に陷しこと
 あり或ハ一國を埋めしことあり島おき所へ嶋
 と湧き海と變トて陸とあり陸を没して海とさ
 殊更甚しきハ今より一千百五十一年以前我

孝靈天皇八年亦當り
 まりやと云ふ所地震へて
 土地人民全く地下に埋
 り又彼七百四十二年我天
 平十四年亞細亞州に地
 震のため村數五百餘り潰
 せ死人の數しきがしと
 ぞ其の後彼千六百六十二
 年我寛文三年即ち唐土の康熙元年清の聖祖即



位の年唐土小大地震ありて北京許りふも死
の數三十萬人ありと實小開關以來の大地震
あり又唐土ハ我享保十六年彼雍正九年大地震
ふて北京の死人十萬と越たりと云ふ又彼千
八百五十五年我安政二年小日本國の江都小
大地震ありて都下大概破損せりと此年小ハ土
耳其國のぎろうさと云ふ所も全く毀ち歐羅巴
の中國ふても諸方破損せり斯く地震ハ人小害
ありともふも我淺間嶽の如き烟を噴く山

世界中小三百餘りありて地の心より湯氣を
導き大空小噴出さむる也億兆の人民安く
此世小居ると得たり火山ハ實小莫太ふ功
り月のあきども唯掃小破烈を起し燃石を投出
し之ガやめ田島を埋め人畜を亡ふこと少かり
らざれども不意小起るもの小ありざきバ避
け難き小ありを以太利國あり去ゆりまを云ふ
烟を噴く山あり此山の麓ハ人家も數多あり
て繁昌の場所あり一ガ彼千八百三十九年我天

保十年の秋小至りやの山俄小鳴り始め又いき

グ間止まざり一不或る日農家の小供兄弟ふて

井より水を汲る庭の草木

乾て枯き人とまると救て

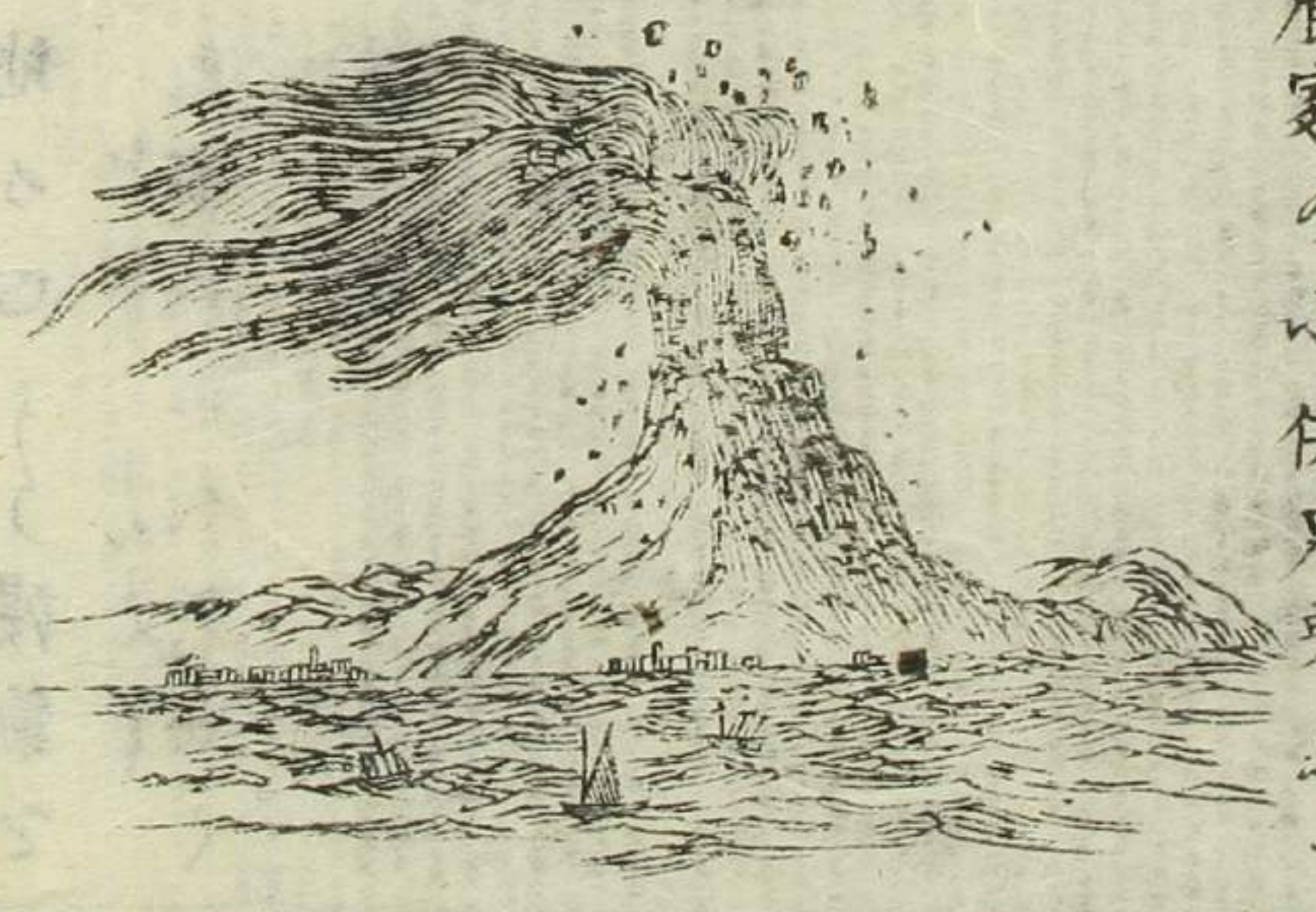
人と立出て兄ふるまの瓶

と下せ一水を得さきバ

怪て更よこれを試と一

不尚不初の如一こハ井の

途中不渡るまのくはまふ



らんと妹ふるりの兄を手傳ハ瓶の底小石を附

け再度井の中へ下りける小亦一滴の水を見さ

きバ大小驚き家小歸り母ハ斯々の事ありと扱

語らんと内小立入り母の居ざるを見て跡は

一何る食事杯仕舞ふりち黒烟四方小塞がり大

砲の音とも覺一き響聞へこハ何事やと驚く所

へ雨親の聲外小聞つけきバ馳寄りてこハ硫黄

臭きハ何事ぞや息止りて既不死人とせりと云

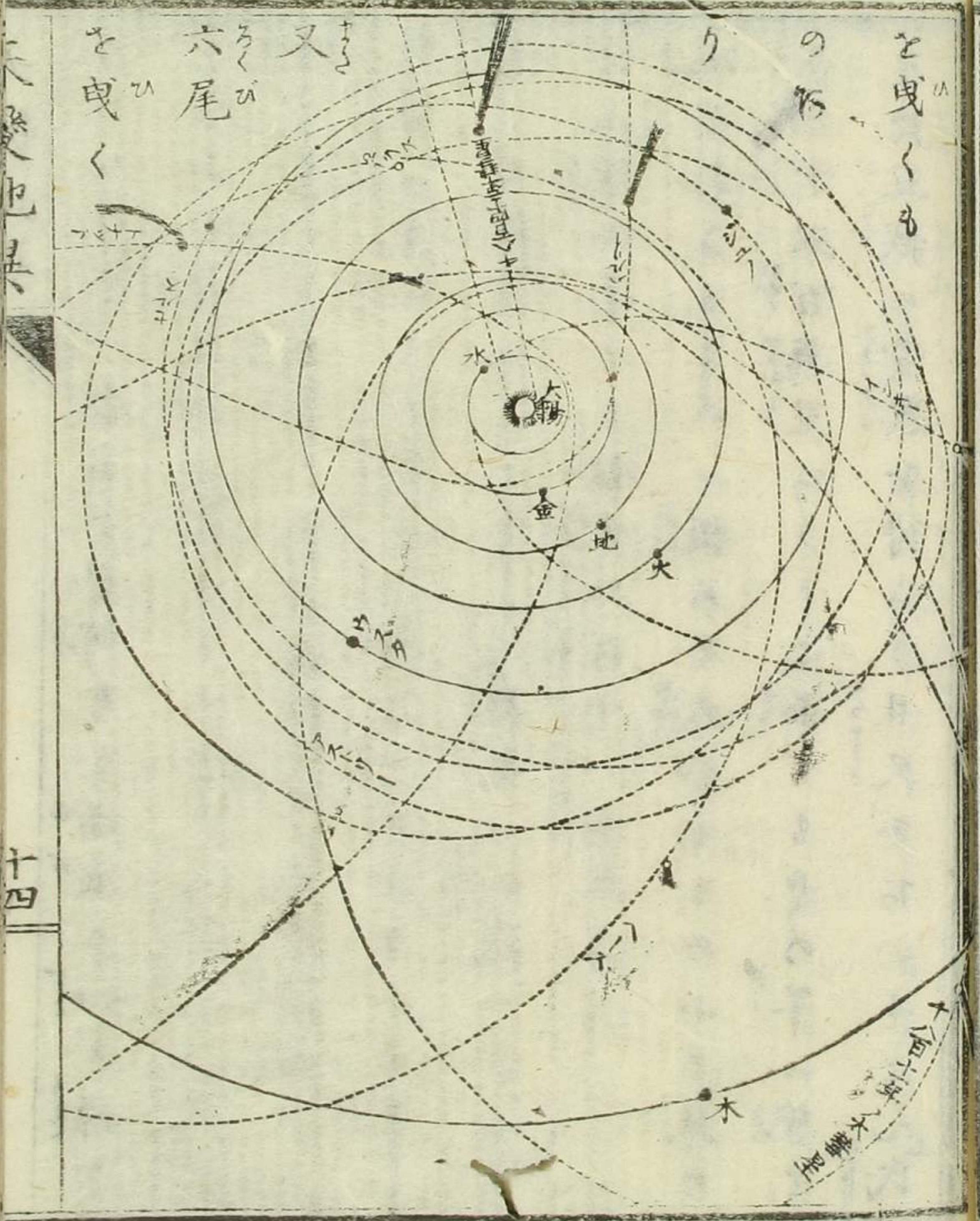
ひも終らむ父聞ひて先日より山鳴て今日いづ

その井も水乾き山の破烈迫きふり急ぎ荷物
を取片附けよと云ふ俵も早くも妻子と共ふ
ぶらと云ふ城下へ行き弟の家も至り未だ時を
移さざる小山より火焰を噴き燃石を投出し麓
の在所皆地下に埋まりと斯ることより考ふ
バ地震火山の災ハ一國或ハ一村の難儀といふ
きとも元と天より億兆の人民を救ふんといふ設
けらきたるりのなきハ心ある人々之が大免天
と怨むることありと云ふ

彗星の事

彗星の數ハ六百許りも有りものおして七十六
年目小顯えりも有り四年目小現ハるりも有
り或ハ二千年を経て出るも有り六百の星皆夫
々の期限有り全く彗星ハ日輪を周り動く星ゆ
一ッおて其の日輪の側小廻り来る時刻ハ自々ら
定り有り猶不燕の春分小来て秋分去り又來
春小渡り来るガ如ク大古ハ此星の出るを見て
或ハ禍災の前兆とあり或ハ瘟疫の前兆と一

方ありと恐れしものなり當時ハ世の中大小開
 け千里の遠方とも見るべき望遠鏡を造り出
 一之を以て天文を窺ふ也名彗星の尾ハ湯氣の
 如き薄きものにて星の体も殊の外薄きものと
 云ふ其證據ハ星の体を透き通し遠き星の光
 を見るべし尾小至りてハ格別輕きものにて或
 天文家考の掛目を算し出せし小二三十目位
 もありべしと云へし彗星のりち体ありて尾
 きものあり或ハ尾ありて体なれものあり一尾



もの有りて一様あり何れも湯氣の如き薄き
 もの小て透き通りたるものなり又彗星ハ光明
 強けきども熱氣ハふきをのりせりの證據ハ
 寒暖計を以て其年の温度を測りたるハ平年と
 少しも異なることなり又彗星ハ凶歳の前兆
 云ふ説ありきども彼千八百十一年我文化八年ハ
 現われたるものハ極めて大なるもの小て尾の
 長九千五百万里ありしと雖どもその年ハ曾て
 たる五穀の豊熟を得たり且又不雨いもとん氏

の説小大古の世界大洪水ありしハ彗星の地小
 近づき水を引たりより起りしと云へども此年
 の彗星ハ正しく大洪水の時小現しし一星ある
 小之がため洪水も出でざれば其の説信を
 足らざる萬一彗星の地小觸るしこせはるも前
 云へる如く非常小軽きもの也恐るべき事ハ
 らを況してや天ハ廣大無邊なるもの小てその
 大空を地の如き些少のもの轉び行くも數の極
 りたる彗星の往て又回るも萬々相觸るし其の恐

一恰も千万里の大洋小五六枚の木葉と浮む
 るが如し誰れをの相觸るゝと恐るゝそのり
 ん或天文家若しや衝當ることもしんうと甚
 定して數ふ比べ説きたると見せばやの衝當ら
 ざることの慥あるハ二億八千一百万小一て
 の衝當るべき恐もはるハ唯一ッありと云へを左
 りとバ彗星の現るゝも恐るゝきもの小あり
 ぞ

虹霓の事

古昔唐土ふてハ虹の騰ると陰氣陽氣を冒まの
 北と唱へ女中權臣杯の盛ある小比べたること
 あり是全く物の理を究めざるより斯る惑いと
 説きしものあり虹の騰るハ村雨のとき小限り
 朝小ハ西小騰り夕小ハ東小見
 るると定り自然の理合し
 起るものやとバ何も怪む
 き小あり今此理を説く人
 とその不當て心得置くべき

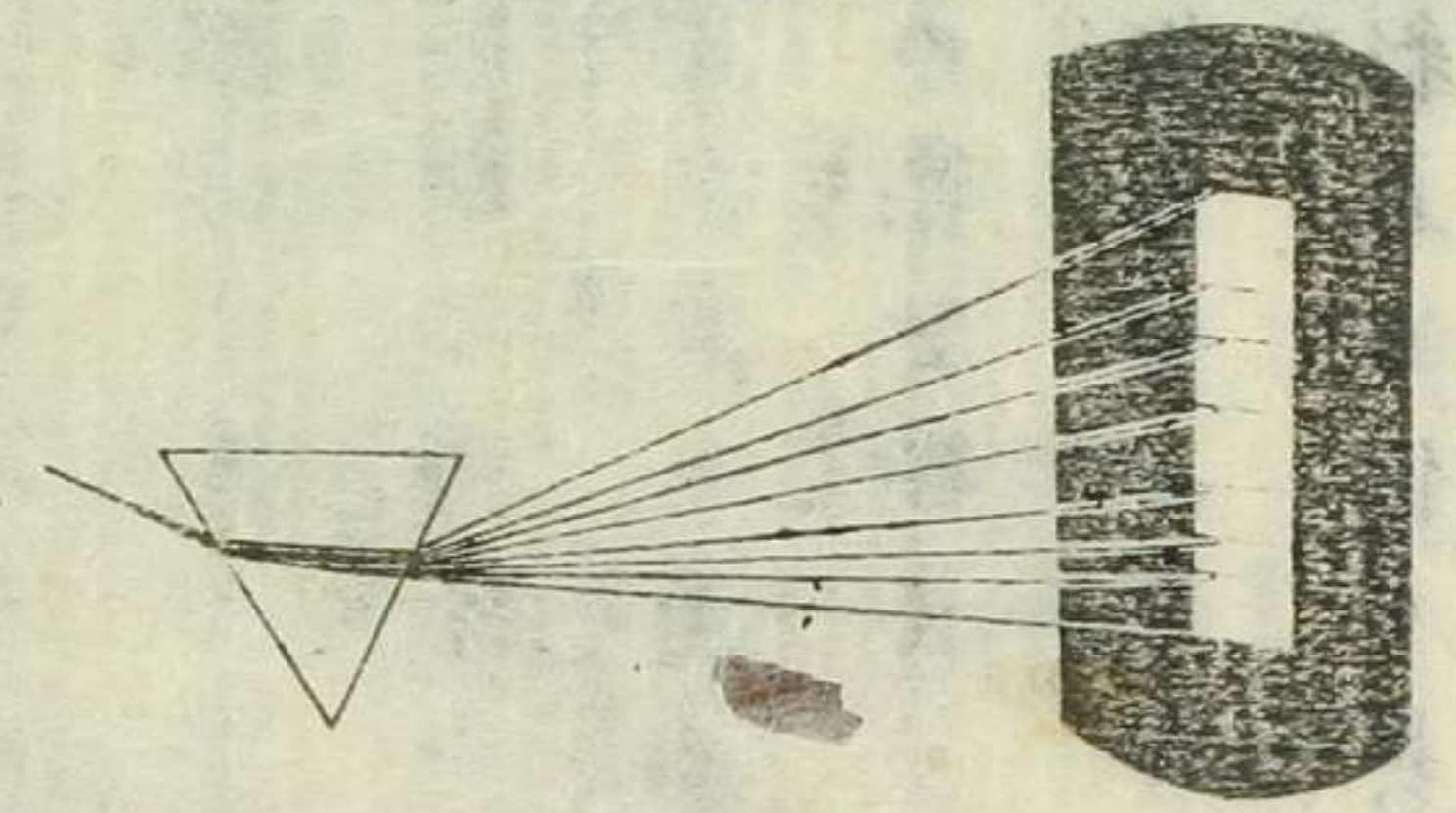


天慶地異

上六

箇條ニツラク第一ハ光の物小當りて折る理合
 第二ハ光の七色小分るの理合なり光の物小
 當りて折る理合ハ誰も知るることみて女中
 の映鏡と持て照し合ハさすハ乃此理小基き
 一ものなり後小もてる鏡より来る光り前の鏡
 小映り夫より折きて我眼小入れバこそ後の姿
 も見るべき道理小是却説此理合より考へるハ
 村雨の水滴と前小もてる鏡と定め此鏡日輪小
 り来る光を受け我眼小投げ返るの理合も合点

由くべし次小光の七色小分るの理合ハ五六寸



許りの三角形小製しと硝子と
 持て天窓戸を閉したる部屋小入
 り戸小小き穴を明け日光の輝を
 容き之と斜小件の硝子へ受け
 バ日輪の光り分きて七色とふる
 べし其の色の次第と下より数へ
 第一と紅色第二と橙紅色第三黄
 色第四と綠色第五と藍色第六と紺色第七と紺

梗色とを此七色ハ固

り日光の本色ふきども

砕けて見へざるの斜

小斯る硝子へ透き通る

より光の道筋曲りて本来

の色と頭をいたるなり虹の

彩色も七色ふて此硝子小透き通りたる

彩色と何も異なることなり右の次第ふきハ村

雨の筈へ難き水滴皆斜小日輪の光と通し夫は



り折きて人の眼小投げ交るもの七色の彩色と

具へ美麗小見ゆるも自然の道理あり扱又朝ハ

西小見へ々ハ東小騰るの理合ハ日輪を後の鏡

小壁へ村雨の水滴と前の鏡小比べふハ朝夕と

も日輪と背小負ひて虹の騰るを見るの理あり

元来虹ハ環の形ふきども下の方ハ地小蔽ハき

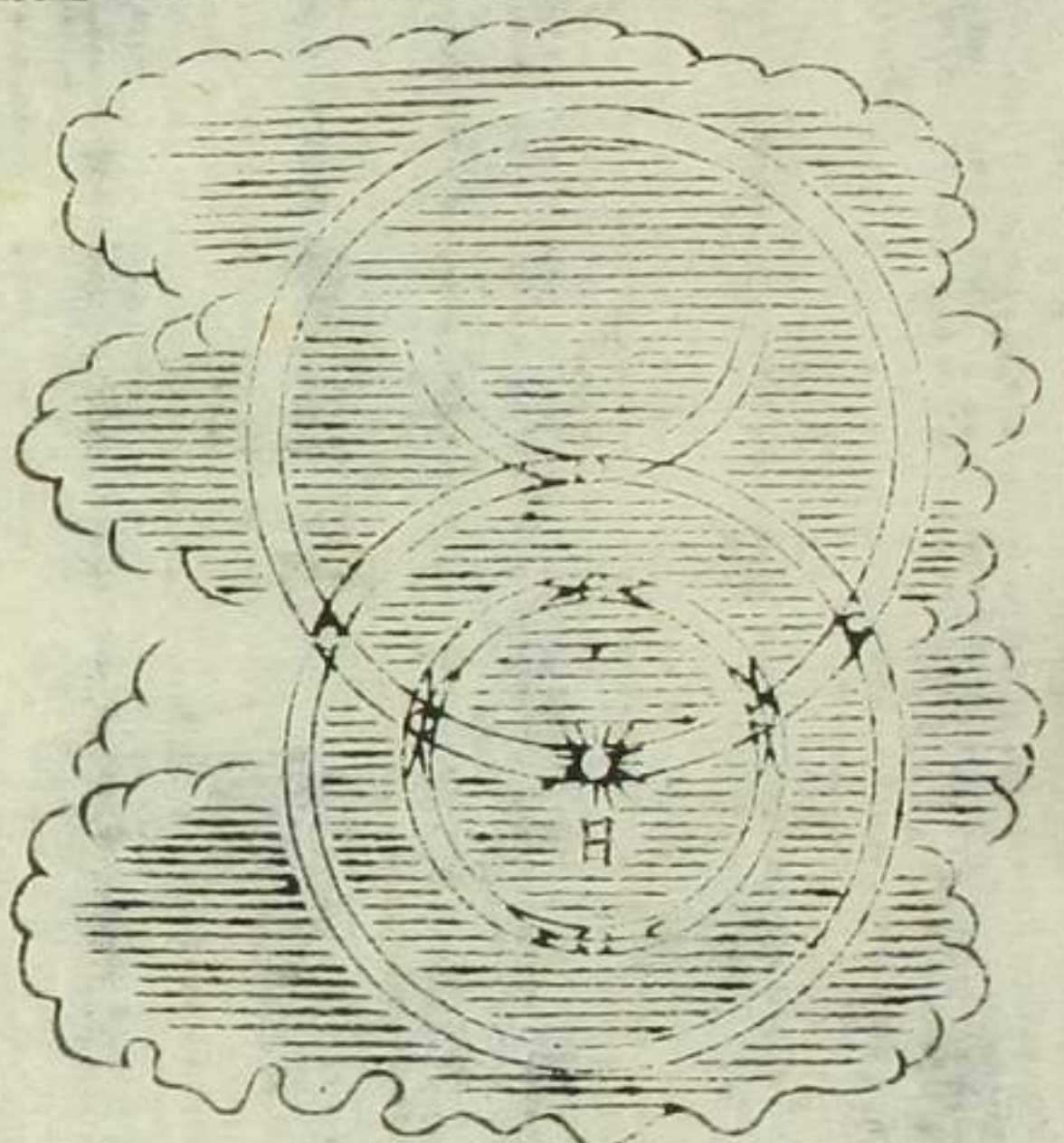
全体と現たさされハ誰も圓さものとハ思わざ

るべし試小船の帆柱或ハ高き丘杯小登り虹の

騰るを見かハ稍ヤ下の方と見るべし又虹ハ村

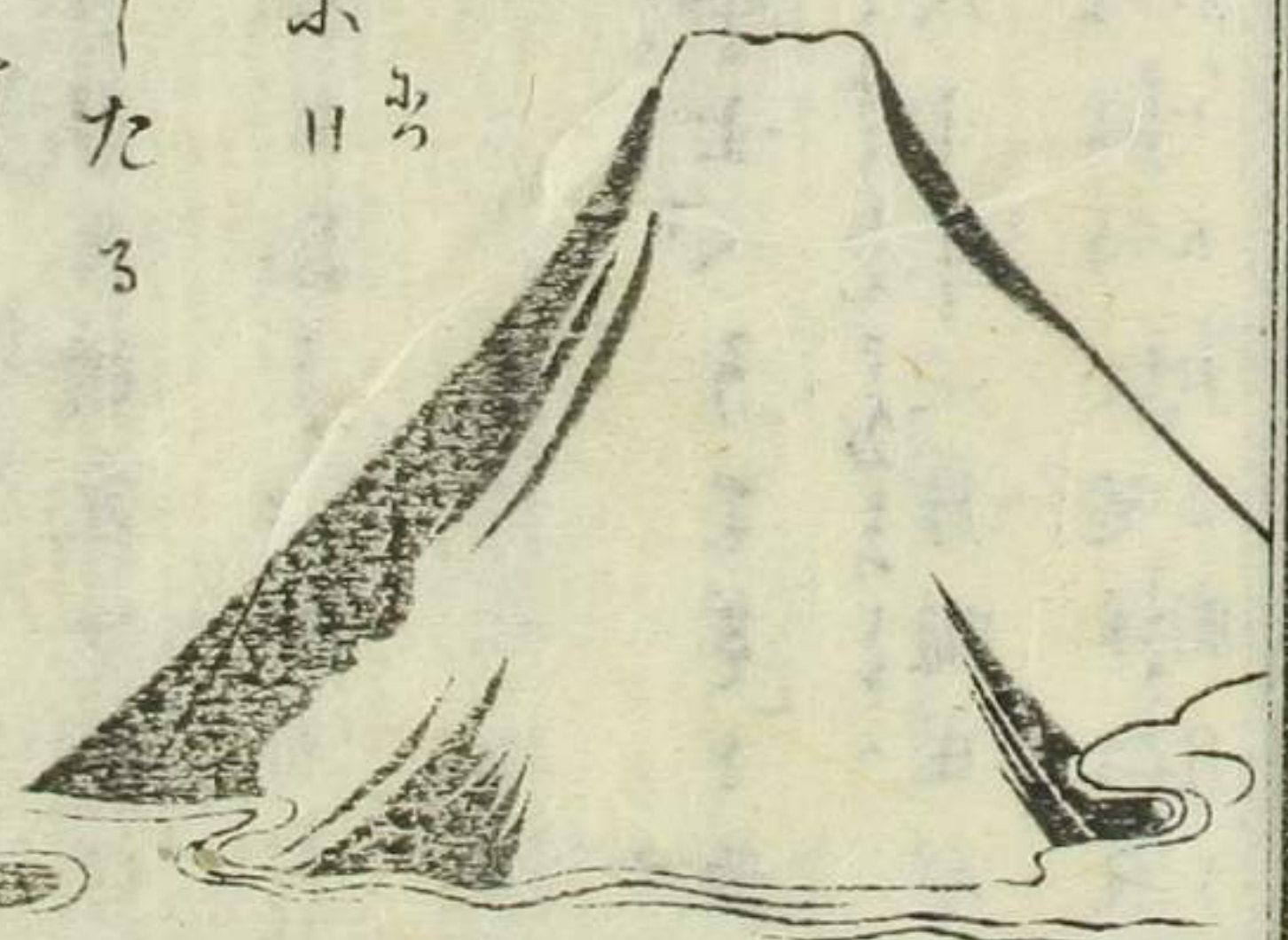
雨小限らど瀑布の水烟日輪より光を受け現を
 る。つり又日光と背小負ひ合と一水と噴き出
 さバ目前小環状の虹と生むぐ一さいきと云ふ
 人ハ天空のが二つ山中おて高三百五十間の絶
 壁より間近く騰りたる虹と見とる小全環鮮
 小輝き美麗と極め且環の中小己と始め同行の
 朋友並小馬杯の象映りたる浅見しふとありと
 云ふ
 九日同時小出でたる事

大古唐土小堯と云へる帝ありしが此帝の時九
 の日輪同時小天小輝きしと昇と云ふ弓の上手
 之と射落したりと云ふ説はきども固より信む
 べき説小ありと日輪の数はるが如く見ゆるハ
 問々あることふきども昇が矢の達まぐき小も
 ありと且射て墜るべき小もありと爰小彼千六
 百三十年我寛永七年日耳曼國の天文學者は
 いまると云ふ人或る日輪の周邊小一ツの暈を
 生じたるを見しが漸く二重三重とあり遂小四



重の暈を生じ暈の重りたる所へ假の日輪を現し真のものと都合七ツの日輪同時小天小輝き一を見たりと元來暈ハ空の氷小日日光を受けて投げ反さ小異あるを斯く云ハ空の氷とハ何れかふるやと問ふ人も何れもきガ空ハ高き程寒さ甚しきものあるハ富士杯

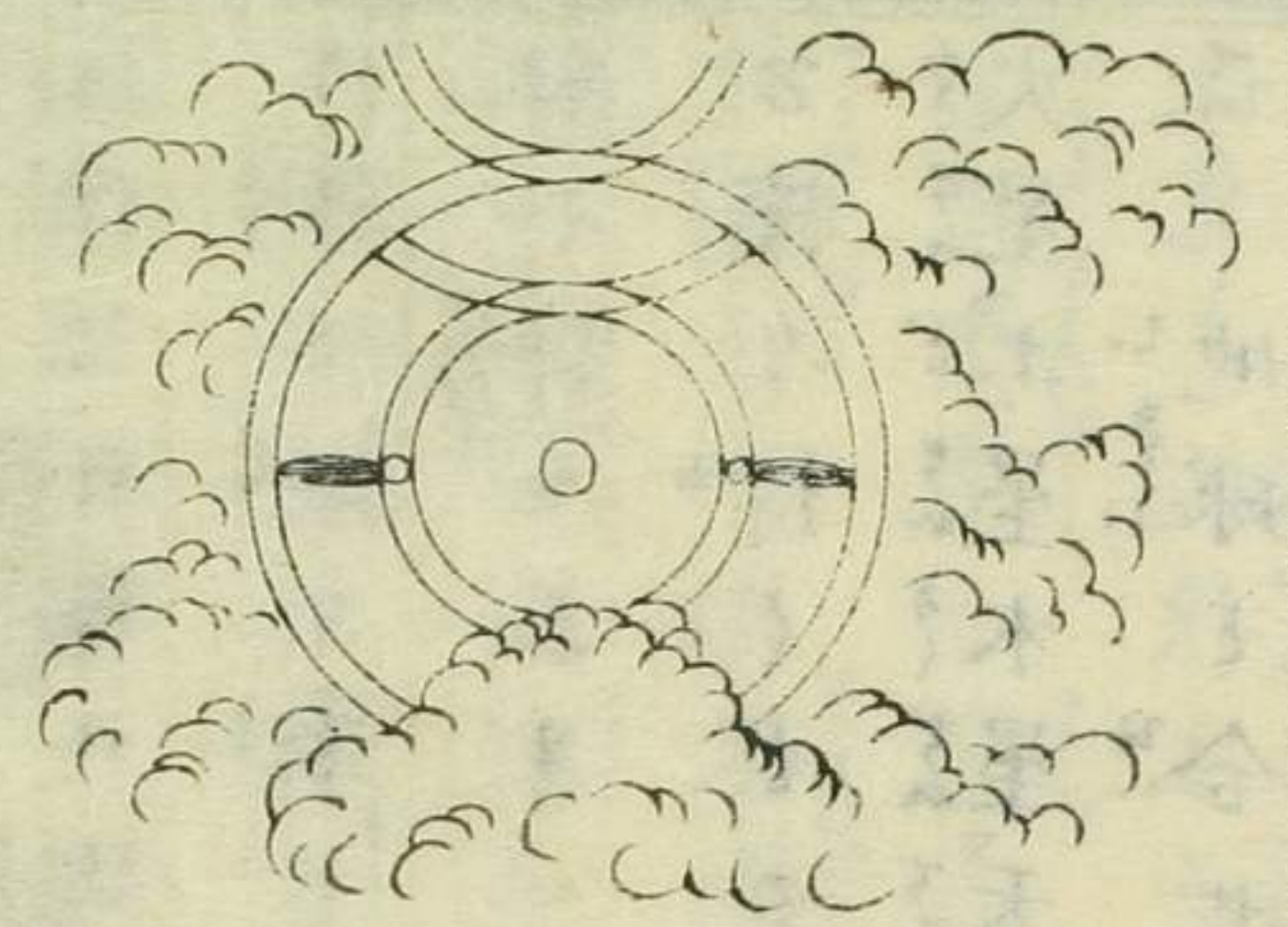
の如き高山夏小も雪を戴くを見て合点行くべしその寒き所へ雨と結ぶべき細やうある水滴騰り凝て氷とあり満面鏡の如く映ふ空小光透通り環の如き光を現したるを日暈と唱へ来り其氷の模様小より一ツの暈を現ハる或ハ二重三重の暈を現ハる此日小現る色と暈ハ四重小



の環互小重りたる所ハ殊更玲瓏とるを以て互
 小日光を投げ反へ相映りて相恰も七ツの日
 輪と掛けし如くあり猶不一ツの燈籠を
 掛け其周邊小六面の鏡を置き互小燈光を映し
 たるが如し何も不思議あることあり

三月並び照る事

中古比耳西亞の名高き天文學士「うりま」と云
 ふもの我萬治三年彼千六百六十年三月晦日の
 夜彼邦の曆我邦の曆と違ひ十五日は造り月を



見よの月の周邊小一ツの白き暈
 定まりし漸くして三ツの暈を重ね
 と生じ漸くして三ツの暈を重ね
 中かす暈の兩側小二ツの月を現
 したるを見たりと月暈の現
 八ツハ日暈と同一道理なき
 を三ツの月同時小出でたるも七

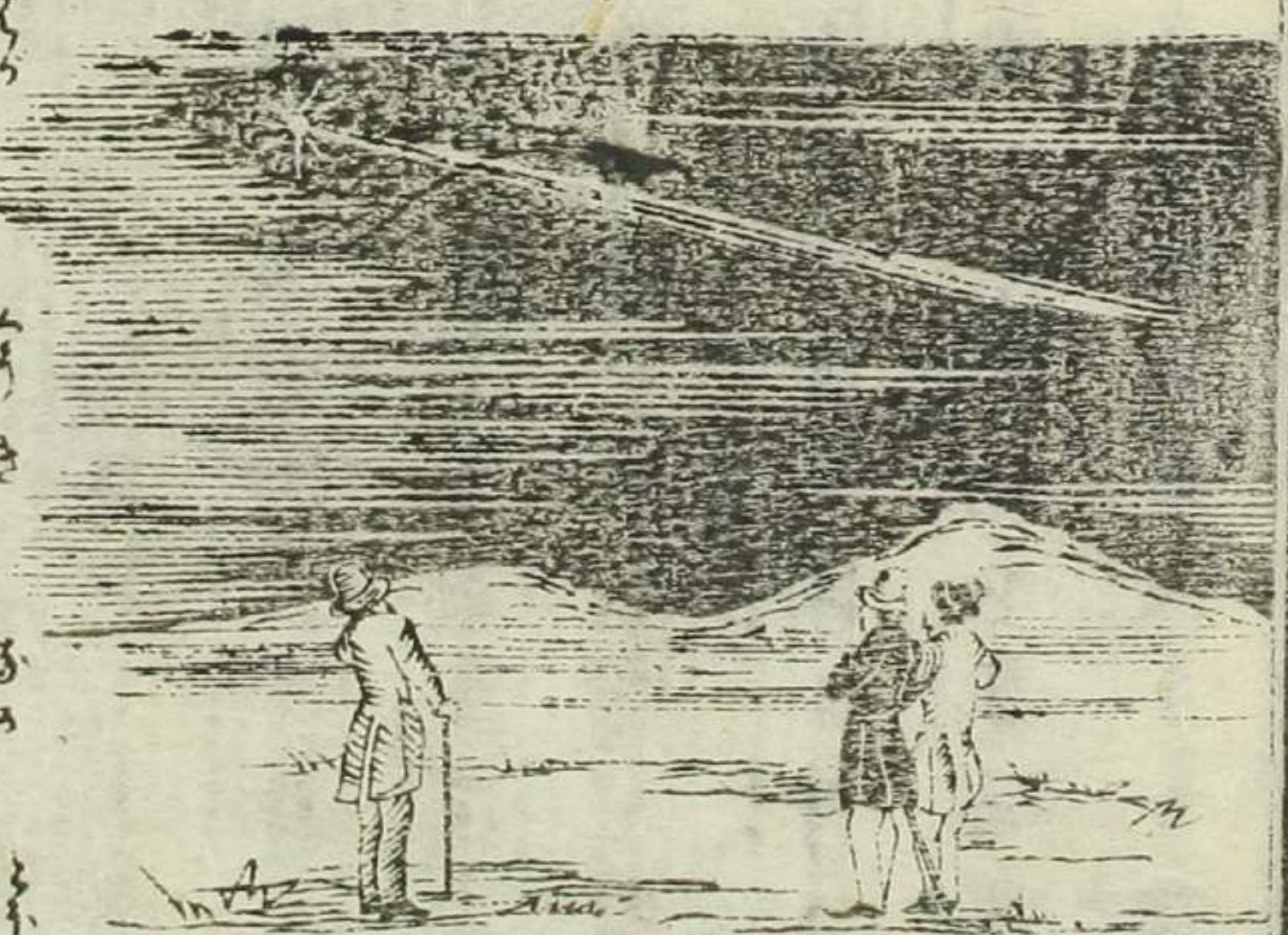
の日輪大空の氷小映ふたると異なることあり
 我邦倍小て何時の頃より七月二十六日の夜
 小三ツの月同時小昇ると云ひ傳へ月待るの習

ひたりり全く此夜小當り斯る幾象を見しこと
るより遂に邦俗とありたるなり人

流星並小火の玉の事

地球の日輪の周邊を旋り全一年を経て再度元
の所へ廻り来るハ同社の著述せる訓蒙窮理圖
解小詳りふせハ爰小贅言せども却説日輪の周邊
を旋り行くもの獨り地球のこなきも水星金星
火星土星木星天王星海王星として七の大なる星
は地球と合せ都合ハツのものをハ惑星とい云

ふあり此外小七十三の
小惑星と前小云へる
六百計りの彗星はりて
同く周り行くものあり
又此外小幾百萬と數
知きを極めて小星は
て旋り行き唯地の周
邊を包める高四十五里許りの空氣の中を通り
行く間此氣と觸れ合ひ光を放つものなり此即



天變地異

二十一

世に流星或ハ火の玉杯と唱ふるものありてこの
星ハ元來石塊なきハ地杯と齊しく自己ハ光
なきものなきと其の周りに行く速極めて神速ふ
る由名空氣と觸き當り燧石の打火刀と觸き火
を放つの理合ふて光を放つものと云ふ遇小地
と間近く来るもの地の物を引く力小引くを落
事ハ唐土の書冊小書記し其の國小墜る石
ありと云ひ歐羅巴の諸國小も奇物を集め置く
場所へ列ね置き諸國小見物させ我國小も諸方

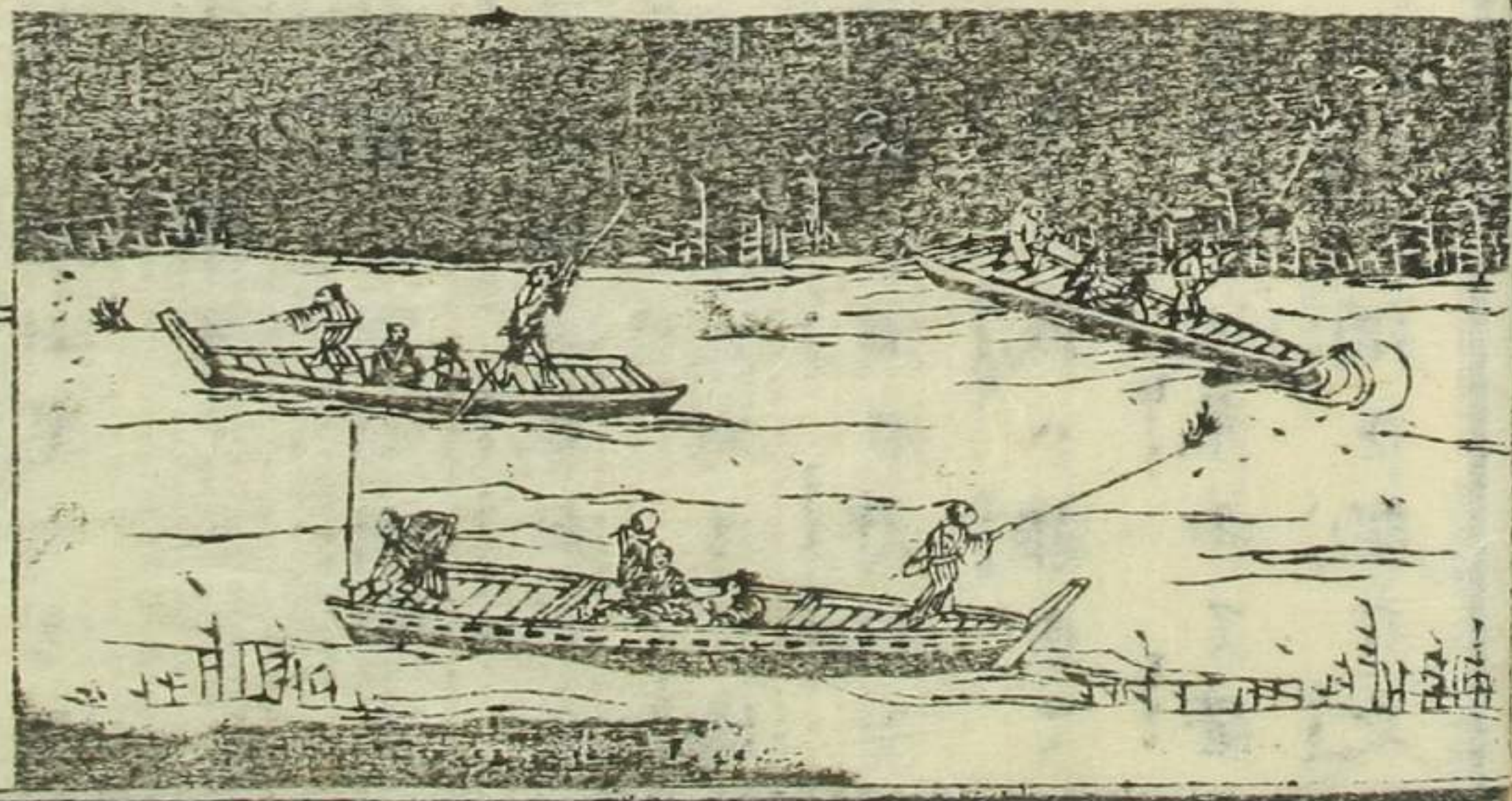
小墜し例し有り余自ら其石を見よる人の話
しを聞く小尋常の石と異あることや其様なき
ども少しく色黒く之を碎き吟味をせし全く地
上の石と質を異ふると云ふ九月十月の間小
此星と見るはと多きハ此星の周りに行く道筋丁
度此頃小至り地球の道筋と互小近く来るが由
也なり

陰火の事

光りばをバ熱く熱けをバ光りば一般の法ふ

此とも熱くして光ふく光りて熱からざるも
 のり湯の如き。何程熱くとも光ふく螢火朽
 木生の海魚海水不知火陰火杯の類ハ光りて
 も熱くならぬ此種の木ハ皆不燃と云ふもの
 水素と調合一燐化水素となり自然の理合を以
 て光を放つものなり同ト種類の中亦ても螢火
 ハ王公貴人より婦人小兒に至るまで誰も愛弄
 せざるハふく殊小宇治川の螢狩ハ京洛間の諸
 人見物のとめ市とあを程ありと聞へト嘗て

此を恐き一人は派聞の
 又朽木より光を放つふく
 り杯の朽ち腐れたるもの
 不最も多く怪しげなるもの
 見ゆきども元と朽木ふく
 ハ兒童の輩暗所ハ持行き朋
 友小奇を誇るの具とすもの
 又生の海魚殊ハ海老杯と
 暗所ハ持行きふく白き光を



放つべし又夜中海水と攪動らば水小光あつと
見ゆべし是全く水の光小あつと極めて細小
る魚あつて水の動く小従ひ鱗鬣と振ひ揺動
るより起るものあり肥後肥前の海小不知火
と周防洋小平家の怨霊火と唱ふる火あつと
あつたら斯く小き魚の莫大小群集し波の浮沈を
追ひ或ハ現ハを或ハ滅へ或ハ集り或ハ離れて
奇怪の状を為しぬきと皆知るべし光あつて螢
火も同様のものあれ見物の諸人酒を酌て之

と樂むも幽趣を得るもの云ふべし狐火人
魂杯と唱ふる陰火の類も亦同トく和を不るの
火あきども沼或ハ墓所杯の間小現を如何小
も物凄く見ゆゆ人々畏きもの様小取沙
汰し或ハ怨霊の火杯と唱へ婦人小兒ハ斯く火
小行逢ふとれ震ひ恐甚しきハ氣絶るもの
何れと実ハ氣の毒あることあり或る人夜深く
沼と渡り物凄く思ひ折柄忽ち青き火の近く
輝しと見たる小漸く我方へ寄り来きバ惡き妖

怪の所業ありやと獨り囁やき行く程ふ之を捕
 へんと思ひ立ち急き歩を進めけきバ追ふもの
 ありて遁にげるが如く急き歩を遁にげ去り我止まきバ
 彼止り我行けバ彼行きて己が動靜を伺ふ様子
 あり愈怒り力と極め追馳け行きしふ忽ち滅き
 て痕を失へり暫くありて遁小葦芽を隔て鮮け
 小現ハきし由ゆ此度ハ息を吞の身を潜め間近
 く寄りて急きふ之と襲おそえんと決意けつぎ徐ゆる小進すすり寄
 せし小火現然ひがえとして少すこも動く様子あり益ますます沈しず

黙もく火の傍小歩たもと寄り急きふ手を舉げて打ち落
 見えバ一片の燐化水素りんかすいそにて何なにも怪あやげふるも
 のふひつかり畢竟前ひつかり小遁かげ隠れかくハ
 自己おのれの動きうごきより空氣くうきを動うごく
 火ひも之このため動うごきしその
 かる小後のちの度たびハ静しずか近ちか寄り
 由ゆ急き空氣くうきを動うごくさき火ひも
 之このため小ぢり居所おどろを動うごく
 さき之こと物ものを譬たとへバ池水いけの面おもふ



浮ぶものもつと運ぶ水も飛入り之を捕へんと
せば其の物必む水に促りて先の方へゆれ我
歸きバ亦水もつを我方へ来るべし然るを静ふ
水と押し分け之を掴まば容易なるべし空氣の
動くも此と異なることなり元來不も不るとハ
天地の間も具もなりたる六十八色の物の一つも
生物も多く草木杯も多少此氣を含まざるハ少
し人も此氣をばらばら生命を保ち得るものも
るが死して骨肉腐る土も返るとき此氣離る水

素と云ふ亦六十八色の物の一つと合ひ前も云へ
る燐化水素といふるなり斯る理より墓所杯ハ
自然此氣も多く透る怨靈の火杯と唱へ来りし
も種なき話ハ何れもなきと元と不も不るの光
ふれバ螢火病木と異ふらば何ぞ畏るべしとの
りるべし人

天変地異 大尾

天變地異

Table with 4 columns and 10 rows of handwritten text in a traditional East Asian script. The text is arranged in a grid within a double-line border.

| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 一 | 二 | 三 | 四 |
| 五 | 六 | 七 | 八 |
| 九 | 十 | 十一 | 十二 |
| 十三 | 十四 | 十五 | 十六 |
| 十七 | 十八 | 十九 | 二十 |
| 二十一 | 二十二 | 二十三 | 二十四 |
| 二十五 | 二十六 | 二十七 | 二十八 |
| 二十九 | 三十 | 三十一 | 三十二 |
| 三十三 | 三十四 | 三十五 | 三十六 |
| 三十七 | 三十八 | 三十九 | 四十 |

